

平成30年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

本校は「地元根ざし、人権教育を行う学校を」という、地域の熱い要望により設立された。その経緯と伝統を大切に継承し、創立以来の人権教育を軸とした教育実践の充実をはかり、今後も柴島高校人権教育の更なる発展をめざす。そのため、全ての生徒のニーズに応えられる学校づくりをめざし、生徒一人ひとりの個性の伸長と持てる力を最大限に伸ばし、自己実現に向けて大きな展望のもてる「確かな学力と生きる力」を身に付けることができる総合学科づくりを行う。

合わせて、障がいの有無や様々な立場の人が、互いに違いを認め合いながら、共に生き生きと充実して暮らすことのできる人権が尊重された共生社会の実現に資する生徒が育つ学校を創造する。

- 1 生徒一人ひとりがそれぞれの個性を生かし、主体的に学習に取り組み、学ぶことの楽しさや成就感を感じる中で、知識・技能を獲得し、思考・判断・表現できる力をつけ、さらに主体性・多様性・協働性を発揮できる資質・能力を身につけることのできる学校
- 2 自己探求と社会参加への自覚を深める取り組みを通じて、自己実現に向けた進路を切り拓ける学校
- 3 活発な特別活動を通して豊かな心と健康な身体を育てる学校
- 4 一人ひとりが活躍し、学びを得ることによって、社会の多様性推進に貢献できる生徒が育つ学校
- 5 家庭との連携を深めるとともに、生徒一人ひとりが地域や社会の人々と関る中で、豊かな人間性と市民性を育てる学校

2 中期的目標

1 主体的な学習に向けた授業改善の推進

- (1) 「協働」をモチーフに授業改善をさらにすすめ、主体的に学ぶ力（生徒自らが考え、理解し、次に学びたいことを見つけ出していける力）を育成する。
 - ア 学力育成部を核として学習力向上に向けた新たな授業形態への改善をはかる。
 - イ 学習者の視点に立った、教材の研究・開発する。
 - ウ 学習方法や方略を獲得させ、生活習慣を見直すことで、学習行動を促しその習慣化を図る。
 - エ 視聴覚機器を積極的に整備し生徒の発表する場を増やす。そのことにより表現力を育成し主体的な学びの姿勢を強化する。(授業アンケートで検証)
 - オ 評価を工夫・改善することで授業の形態を改善し、生徒の主体的な学びを促進する。校内でそのための議論を深める。

- (2) ユニバーサルデザインを意識した教育環境、授業づくりを推進する。

- ア 全教職員で全ての生徒がわかりやすい授業づくりに取り組む。
- イ 電子黒板やプロジェクターなどの視聴覚機器を充実させることで視覚による情報を増やし、理解を促進させる。(研修を実施する)

2 キャリア教育・人権教育の推進

- (1) 3年間を見通したコアカリキュラムの充実を図る。
 - ア 「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」、特別教育活動を通じて、自己の探求と、他者とのつながり、自分と社会のつながりを理解させ、夢と志を持った進路選択と自己実現が図れるよう支援する。
 - イ 生徒会活動を通して、学校生活における様々な課題を発見し、自他の個性を活かし、協働して課題克服に取り組む体験を通じて市民性が育つよう支援する。
- (2) データを科学的に分析し、その結果に基づいた科目選択・進路選択を積極的に進める。(目標値：希望進路達成率95%以上を維持する)
- (3) 社会参加を促す体制作りを確立する。
 - ア 地域連携型授業並びに特別教育活動を通じて、生徒が、地域社会に直接アクセスすることや、地域の方が「ななめの関係」としての支援者となっていただくことができるように地域連携部を核として連携体制の整備をすすめる。
 - イ 地域活動協議会への参加を通じて、地域と連携し、教育的・社会的資源として貢献できる学校づくりをすすめる。

3 安全安心で魅力ある学校づくり

- (1) 安全で安心な学校づくり共同研究校として、人権教育推進委員会を中心として、調査・研究をすすめ「世代を超えた通わせたい学校」の創出につとめる。
- (2) 支援教育サポート校として、研究をすすめ、「ともに学び、ともに育つ教育」についての公開授業、巡回相談を実施する。
 - ア アセスメントに基づく個別の教育支援計画の作成と教育実践についての研究を促進する。
- (3) 通級指導教室設置校として生徒・保護者のニーズに応え、授業の充実、学校全体の環境整備を図る。

4 ICTを活用した校務の効率化

統合学校ICTネットワークの活用と、校内イントラネットの整備・総合をすすめる中で、業務の精選と効率化を図り、生徒と触れ合う時間の確保に努める。(学校教育自己診断で検証)(51.2%→60%)

【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [平成31年1月実施分]	学校運営協議会からの意見
<p>【学習指導等】 全般的に肯定的な意見が下がっていることは、真摯に受け止めなければならない。特に、本校では「主体的・対話的で深い学び」(アクティブラーニング)を学校全体で取り組んでいるが、そのことにより「学習する意欲がわく」とした生徒は昨年より -22.5%であった(教職員95.4%、生徒) 昨年 90.1%→今年度 67.6%)。これは、アクティブラーニングの取組みが普通になり、もう一段上の学びを生徒に求めてもよい時期に来ているのかもしれない。コアカリキュラムを中心に校内全体での授業の活性化と高い市民性をつける学びをめざしていきたい。*「主体的・対話的で深い学び」:90.1%→67.6% 「論理的思考力・表現力」:76.6%→63.2%</p> <p>【生活指導等】 「自立・自律の意識の育成」を心がけて学校として取り組んできたが、昨年度より肯定的な意見が下がっている。コアカリキュラム等の授業だけでなく、行事やクラスでの取り組みの中で、生徒一人ひとりが主体的に判断し行動する意識の高まりをつくる仕組みを作っていきたい。*「自立」:86.4%→73.2%、「自律」77.8%→67.3%</p> <p>【人権教育】 「ともに学び、ともに育つ教育」の肯定的意見は、昨年度よりは下がっているものの、一定の成果を挙げている。多様性を尊重し、異なる考えの人とも協働できる態度の育成についてはコアカリキュラム以外でも進めているが、生徒にもっとその意義を伝えたい。*「共生社会に向けての努力」90.6%→86.3%、「他者との協働」生徒:85.6%→72.9% 教職員:83.3%→89.2%</p>	<p>第1回(6/15)</p> <p>○学校経営計画について 今までの流れを引き継ぎながら新たなものを導入していきたい。 →安全安心で魅力ある学校づくりにしっかり取り組んでほしい。</p> <p>○人権教育推進委員会方針 集団作りとアクティブラーニングは切り離せない。クラスを超えて学ぶ集団づくりを行う。密接に生徒と教員が関わり合い、生徒の集団づくり、教員の集団づくりを行う。 →「主体的・対話的で深い学び」(アクティブラーニング)の更なる展開を期待する。</p> <p>第2回(11/30)</p> <p>○授業見学感想(ライブレコーディング、人間関係演習、古典) →色々な工夫の中で自分を探していける場面があった。 →どの授業も生徒が参加する活動の授業で、核になるものであり、推奨されるべき。ただ、教師の数がこれから問題になってくる。</p> <p>○人権教育推進委員会総括に向けて 今日の集団育成の指針をしっかりと出していく。柴島の取組みは、文科省の示していることの実践であり、人権教育・集団育成が正統であるととらえて取り組んでいく。 →人は多くの人々の力を借りて自立(自律)できているということを知ってもらえるようにいろいろな事例を示してほしい。</p> <p>○SNSへの差別的書き込みに係る報告 →まず教師が、そして生徒が差別を許さない集団になっているというムードがみんなに滲み入っていれば、被害にあった時にすぐ訴えられる。</p> <p>第3回(2/1)</p> <p>○学校経営計画の達成状況について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・評価が下がっていることについての分析は? →生徒・保護者と教職員の意識の差には注目しなければならない。 →アクティブラーニングは普通になってきていて、改めて学習意欲がわくという実感がないのかもしれない。もう1枚上のレベルを考えていく必要がある。生徒の力の向上の実感がないことが課題。 ・「させる」という使役動詞が多いのが気になる。主体的と言いつつ「やらせる」はおかしい。学ぶ楽しさを実感するには教職員の意識変化が必要なのではないか? ・評価に対する改善が重要。 <p>○本年度の分掌総括について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・探究的な学習がある一方で、先生方は探究していないのではないか? ・本音が大事なのではなくて、それをどうコントロールしているのかを見せるのが大事である。教員が何をしているのか、何を考えているのかを伝えることが大事。 ・同質的に安心なのではなく、相互尊重による安心を目指していかなければならない。 ・「柴島スタイル」ではなく、「柴島プライド」という教員がいるが、そうだと思う。

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	(進捗状況) 自己評価
1 主体的な学習に向けた授業改善の推進	<p>(1) 生徒の発表の場・機会を増やし表現力を高めるとともに互いの違いを学ぶ。</p> <p>(2) 授業力向上を図るため教科での授業のアクティブ・ラーニング化を進める。</p> <p>(3) 電子黒板を活用した教材開発を進める。</p> <p>(4) ユニバーサルデザインを意識した教育環境、授業づくりを推進する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・アクティブラーニングの視点から生徒が自ら課題を発見し、考え、発表する機会を増やす。 ・視聴覚機器をさらに活用し表現力の育成を図る。 ・新規に設けた総合文化発表会を生徒の学習活動・部活動の発表の機会として有意義なものにする。 ・「視覚化・協働化」をキーワードにした授業改善の推進を図るための研修と相互に公開授業研修会を継続的に実施する。(研修2回/年、公開授業2回/年) ・ユニバーサルデザイン化をキーワードに各教室に整備されたプロジェクターを活用し視覚による理解を促進する。 ・通級指導教室の成果を全体に還元し、すべての生徒にとって、よりわかりやすい授業作りを進める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校教育自己診断「アクティブ・ラーニング」の項目(90.1%→91%) ・学校教育自己診断「自主的学習」の項目(58.0%→65%) ・学校教育自己診断「ICT機器・視聴覚機器」の項目(78.8%→80%) ・研修の実施と内容を点検し成果を求める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・コアカリキュラムを中心とした授業改革で「主体的・対話的で深い学び」への取り組みは進展してきたが、生徒の意識として学習意欲の喚起につながっていない。今後の課題とする。(学校教育自己診断「アクティブ・ラーニング」では教職員94.4%→95.4%、生徒90.1%→67.6%と一昨年度並みに減少)(△) ・10月に総合文化発表会を校内とザ・シンフォニーホールで実施し、「柴島での学び」として、学習活動・部活動の成果を校内外に発信することができた。(◎) ・授業公開期間を2回設けた。また、5名の10年経験者研修対象者を中心に研究授業と研究協議を実施して、共通の評価用紙を活用して授業デザインを検討した。生徒が主体的に取り組む学習につなげていきたい。(学校教育自己診断「自主的学習」では教職員44.4%→38.5%、生徒58.0%→43.7%)(△) ・ICT機器の活用は概ね定着した感があり、電子黒板活用の研修会を実施したが、さらなる活用方法を追求するために、教職員間で情報交換を図る必要がある。(学校教育自己診断「ICT機器・視聴覚機器」では教職員88.9%→90.8%、生徒78.8%→77.0%)(△) ・教室内の電子黒板の活用など教職員の授業のユニバーサルデザイン化の意識も定着している。(○) ・8月に通級指導に係る研修会を行い、通級指導教室の取り組みについて校内全体で理解を深めた(◎)
2 キャリア教育・人権教育の推進	<p>(1) コアカリキュラムのさらなる充実、効率化を図り次世代を担う「生きる力」の育成を図る。</p> <p>(2) コアカリキュラムの授業における地域教育資産の開拓を図る。</p> <p>(3) 科学的データ分析による科目選択・進路選択</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・コアカリキュラム3年間の指導について継続的に改善を加えるとともに、評価法の研究を行う。 ・地域活動協議会への参加と連携を行う。 ・地域企業との連携授業を継続して実施する。 ・地域ボランティア活動への参加を行う。 ・出身中学校への訪問を実施する。 ・コアカリキュラムの活用でコミュニケーション能力をはじめ、論理的思考力・判断力・表現力の育成に継続して取り組む。 ・生徒の資質・能力を科学的に分析し科目選択や進路指導に引き続き活用する。 ・「産業社会と人間」(ライフプランニング)の授業などを通し自分を知り自分を見つめさせ、自分の将来を考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・校内研修で成果の報告を行う。 ・学校教育自己診断「探求力」の項目(77.5%→80%) ・学校教育自己診断「論理的思考力・表現力」の項目(76.6%→78%) ・学校教育自己診断「地域とのかかわり」の項目(76.0%→78%) ・学校教育自己診断「進路に関する情報提供」の項目(83.6%→85%) ・進路達成率(98%→98%) ・学校教育自己診断「自分の生き方を自分で決める力の育成」の項目(86.4%→88%) 	<ul style="list-style-type: none"> ・年度末に3年間指導の検証を実施し、3月に校内研修で報告が行われた。(○) ・東淀川人権教育研究会において、本校はアクティブラーニングについて担当し、地域の小中学校とともに全体会において前川喜平氏を招いてその前提条件について検討した。(◎) ・淀川キリスト教病院と部活動の地域清掃活動、ボランティア部の小学校放課後活動支援、和太鼓部の地域の障がい者施設での技術指導等のボランティア活動を行っている。(◎) ・出身中学校への生徒の訪問は、中学校からの資料が届かない等の意見を踏まえて実施しなかった。(△) ・3年生のコアカリキュラム「卒業研究」は非常に充実した内容であった。他の科目も自ら探求する内容をさらに工夫している。また、教職員は思考力・判断力・表現力の育成を意識して授業に取り組んでいる。(学校教育自己診断「探求力」では、教職員80.6%→76.9% 生徒77.5%→72.8% 「論理的思考力・表現力」では教職員75.0%→78.5% 生徒76.6%→63.2%)(△) ・コアカリキュラム「協働」において淀川キリスト教病院との連携、「商品開発」においては、菓匠あさだと連携している。(学校教育自己診断「地域とのかかわり」教職員88.6%→78.5% 生徒76.0%→63.6%)(△) ・進路に関する情報提供が適切に行われている。(学校教育自己診断「進路に関する情報提供」教職員77.8%→83.1% 生徒83.6%→77.0% 進路達成率96.0%)(○) ・「産業社会と人間」(ライフプランニング)の授業などを通し自分を知り自分を見つめさせ、自分の将来を考えさせ、時間制作等々に主体的に取り組むことができた。(学校教育自己診断「自分の生き方を自分で決める力の育成」では、教職員68.6%→64.6% 生徒86.4%→73.2%)(△)

<p style="text-align: center;">3 安全安心で魅力ある学校づくり</p>	<p>(1) 熟慮して判断し自立ある行動のできる生徒の育成する。</p> <p>(2) 互いの違いを認め合い、尊重し合うことを学ばせる。</p> <p>(3) 「ともに学びともに育つ教育」についてさらなる充実を図る。</p> <p>(4) 生徒同士が協働して物事に取り組む力を育成する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 時間管理や学校からの連絡事項などを、自らコントロールできるように指導し、社会人としての基礎を築かせる。 • 人はそれぞれ違いがあることを学び、たとえば考え方や価値観が異なってもコミュニケーションができる力を育成する。 • 自立支援コース生を含めすべての生徒が「ともに学び、ともに育つ」ことの意義を認識し、社会に貢献できる力を育成する。 • 授業などを通して他者と協働し課題を解決する力を伸ばす。 	<ul style="list-style-type: none"> • 学校教育自己診断「自分を律する力の育成」の項目 (77.8%→80%) • 学校教育自己診断「異なる価値観の人とのコミュニケーション力の育成」の項目 (85.0%→88%) • 学校教育自己診断「共生社会に向けての努力」の項目 (90.6%→92%) • 学校教育自己診断「他者との協働」の項目 (85.6%→88%) 	<ul style="list-style-type: none"> • 教育活動全般、特に科目選択や生徒会活動を通じて「自律」の精神の育成を心掛けて取り組んできた。(学校教育自己診断「自律」では 教職員 68.6%→64.6% 生徒 77.8%→67.3%) (△) • 互いの違いを認め合い多様性を尊重することを学校として徹底しているが、生徒の意識が力がついたと実感までは持てていない。(学校教育自己診断「異なる価値観の人とのコミュニケーション力の育成」では 教職員 86.1%→87.7% 生徒 85.0%→76.3%) (△) • 「ともに学び、ともに育つ教育」も定着してきている。(学校教育自己診断「共生社会に向けての努力」では 教職員 77.8%→90.8% 生徒 90.6%→86.3%) (△) • 異なる価値観の人とも協働する態度の育成についても教員の意識は上がっているが、生徒の実感としては、一昨年度並みに戻った。(学校教育自己診断「他者との協働」では、教職員 83.3%→89.2% 生徒 85.6%→72.9%) (△)
<p style="text-align: center;">4 ICTを活用した校務の効率化</p>	<p>(1) ICT化をさらに進め、生徒への連絡事項の整理や、教職員間の情報共有を進める。</p> <p>(2) 校務のICT化を進めることで会議の効率化を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 生徒向け電子掲示板の充実を図る。 • ホームページやブログ、メールなどで生徒や保護者への連絡事項の徹底や、学校行事などの広報に活用する。 • 教職員間での連絡事項や周知事項の徹底、意見交換などをICTの活用で進め、会議の効率化に貢献する。 • 多様な働き方に対応した会議の持ち方等の工夫を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> • 学校教育自己診断「Webへの活用等」の項目 生徒(86.1%→88%) 保護者(94.4%→95%) • 職員学校診断アンケート「会議の充実・時間短縮」の項目 (40.0%→50%) 	<ul style="list-style-type: none"> • 校内の連絡用掲示モニターを活用して生徒向けの情報を伝えているが、情報がやや減ってきている。教室の変更等の連絡は、放送等ではなく、緊急以外はモニターを活用したい。(△) • 情報発信については Web の活用が定着し、ブログの更新は各先生方に新鮮な情報をアップしていただいている。また、オープンスクールの申し込みや学校教育自己診断では、アンケートフォームの活用が効果を上げている。しかし、古い情報がそのまま残っていたり、「柴島高校ガイド」の学年ごとの更新が反映されていない部分があった。(学校教育自己診断「Webへの活用等」 生徒 86.1%→64.5%、保護者 94.4%→84.1%) (△) • ICT活用の会議の効率化は進んだ。多様な働き方の部分を web 上の掲示板を活用してカバーする試みが集団育成部において行われた。今後さらなる改善を要する。(学校診断アンケート「会議の充実・時間短縮」教職員 40.0%→50.8%) (○)